

# 国際交流と英語教育

— その接点としての TOEIC<sup>®</sup> (1) の指導 —

白井雅裕 (同志社女子中学・高等学校)

## 「私の」国際交流

国際交流ということばにはある種の華やかさが伴っている。そう呼ぶかどうかは別にして、長期休暇前後の出国ラッシュや入国ラッシュの報道を見れば、そのことがイメージとしては理解できるであろう。

国際交流とは何か。『広辞苑 (第六版)』(岩波書店)にその項目はない。これはことばの組み合わせによる表現のようだ。『新明解国語辞典 (第六版)』(三省堂)によると、国際とは「自国の中だけにとどまらず、他の国と何らかのかかわりを持つこと」とあり、「国際交流を深める」という用例がある。また、交流は「異なる組織・系統に属するもの間に、人の行き来や交渉が行なわれること」とあり、「国際交流」という用例がある。これをもとにして広義、狭義に考えると、実にさまざまな活動が国際交流に含まれることになる。

学校法人同志社では、国際主義教育委員会が国際交流プログラムの一環として国際交流に関するエッセイコンテストを毎年実施し、国際交流に関するエッセイを学内の学生・生徒から募り、国際交流や国際問題に関する考えを発表する場としている。筆者は、2007年度に同コンテストの審査をする機会を得た。

第一回の会合でその年のテーマが話し合われ、筆者が「『私の』国際交流」を提案し、最終的にそれが採用された。提案の趣旨は、国際交流を抽象的に捉えず、また外交というようにともすれば自分の日常生活の枠の外のあるものとしても捉えず、もっと身近で自分がその現場にいるものとして考えてほしいとの願いがあったからだ。

学校教育においては、英語学習の動機付けという観点からも、この「私の」という限定詞が大切なのではないかと思う。

## なぜ英語なのか

国際交流が、他の国との何らかのかかわりの中で人の行き来や交渉が行なわれることであるならば、当然のことながらことばが必須のツールになる。世界に存在する言語は千数百とも数千とも言われ、また国連の公用語としては、英語、フランス語、ロシア語、中国語、スペイン語、アラビア語が指定されている。

しかし、グラドル（1999）の指摘を見ても明らかなように、今後もしばらくは英語を学び使う人の数が増えるのは確実で、いろいろな分野で英語が *lingua franca*（共通語）としての役割を果たしていくのも事実である。

「たかが英語、されど英語」とはよく言われることばであるが、けだし至言である。

## 英語力を測定する「ものさし」としての TOEIC<sup>®</sup>

英語に対する関心の高まりは、たとえば TOEIC<sup>®</sup> の受験者数の推移を見ても明らかである。『企業・学校における英語活用調査—2009年』によると、2008年度の受験者数は IP テストと公開テストをあわせて94万人で、過去10年間でほぼ倍増している。

なぜ人々は競ってテストを受けるのか。これは「卵が先か、鶏が先か」という議論になるが、英語学習者が自分の学習の成果、言い換えれば英語力の伸びを知りたいという気持ちと、企業や学校が社員や学生に客観的な英語力の証明を求めようになってきたことの相乗効果の表れであろう。いずれにしても求める側と求められる側があり、そこに当然「スコアアップ」というニーズが生まれるのである。

TOEIC<sup>®</sup> は、英語力に変化がなければ、何回受験しても同じスコアが出るように設計されている。英語力を測定する「ものさし」たりうる所以である。

そのことはこう説明するとわかりやすい。紙テープを用意して何センチあるかとたずねたとしよう。20cm、23cm、25cm…と答えは様々で、当たらずとも遠からずだが、見た目ではどうしても差が出てしまう。実際にこのテープをものさしで測ればきちっと24.3cm という数字が出る。見た目と現実の数値には誤差があるのである。英語力も同じであろう。なんの基準もなしに英語ができるとかできないと言っても、それは主観的な印象に過ぎない。この紙テープを見て大体何センチというのと同じことだ。TOEIC<sup>®</sup> というのは「スコア＝英語力」を示す「ものさし」なのである。その客観性ゆえに、必要に応じて目標設定が可能になる。その設定値に照らし合わせて英語力が判断されることになる。

## 英語力と受験「技術」

TOEIC<sup>®</sup> のスコアをアップするには二つの方法がある。ひとつは英語力を伸ばすこと。「TOEIC<sup>®</sup> スコア＝英語力」ということを考えれば当然のである。しかし英語力は一朝一夕に伸びるものではない。このことはすべての英語学習者が経験していることではないだろうか。英語力というのは「聴く」「話す」「読む」「書く」といういわゆる4技能の総合力であり、さらにそれが実践性をともなうコミュニケーション能力に統合されたものである。それぞれの技能にはそれなりに指導法、学習法があるが、それを論じることは本研究の目的ではない。

TOEIC<sup>®</sup> の指導をしていると、そのスコアに面白い現象を見ることが出来る。例えば『公式問題集』に収録されている模試を使う。1回目は規定通り120分で解答させ、答え合わせはしない。1～2日後、今度は時間の制限を設けずに自力で解答させる。CDは何回聴いてもよいが、辞書などは参

照不可とする。それで両方のテストの答えあわせをすると、まず間違いなく2回目のスコアのほうが高い。この差は何か。これは本来英語力としては持っているが、何らかの理由で TOEIC<sup>®</sup> のスコアに反映されていない部分、言いかえれば2回目のスコアのほうがその人の英語力をより反映としていって差し支えない。二つのスコアの差はその時点での「伸びしろ」なので、それをできる限りスコアに反映させる指導技術が、英語そのものの指導技術とは別に TOEIC<sup>®</sup> 指導者には求められるのである。

多くの TOEIC<sup>®</sup> の受験者は、進級や進学、昇進、海外赴任などのためにスコアアップを必要としている。昨年の夏に調査と取材を兼ねて参加したアルク主催の「第3回2日間集中！ TOEIC<sup>®</sup> テスト860点突破セミナー<sup>(2)</sup>」の参加者の声を聞いていてもそのニーズが伝わってくる。彼らは、地道に英語の勉強を続けて、数年後に TOEIC<sup>®</sup> のスコアがアップするのを期待しているのではない。1年後、いや半年後に、ひょっとするともっと短期間にスコアがアップすることが喫緊の目標なのである。

このような受験者のニーズに応えるためには受験「技術」の指導が必須である。これは小手先だけの、できもしないことをあたかもできるように見せかける「技術」ではない。上で述べた「伸びしろ」をダイレクトにスコアに反映させるためのものである。TOEIC<sup>®</sup> は英語力を測定するものさしなので、本来外的な要因に測定値が影響を受けることはないはずだ。しかし TOEIC<sup>®</sup> を開発・制作した ETS<sup>(3)</sup> 公認のテキストは少ないが、Trew (2007) は strategies の解説に1ページを費やし、その習得を奨励している。これはこのテキストの旧版にはなかったもので、ETS 自体が受験者のニーズを意識し、それに応えようとしているのではないかと推測できる。

## TOEIC<sup>®</sup> 指導技術としてのトレーニング／コーチング

TOEIC<sup>®</sup> のスコアに英語力を十分反映できない原因は何か。TOEIC<sup>®</sup> 受験者の多くが120分で200問を解答できないことを経験する。特に後半のリーディングでは苦戦する。まず時間の管理を徹底することが短期間でスコアアップを達成する鍵になる。制限時間を物理的に延ばすことはできないが、受験「技術」を活用することによって時間の管理を徹底し、正解のためのヒントに行き着く時間を短縮する、あるいはそのことのためだけに時間を使うことは可能である。ヒルキ・ワーデン・前田 (2006) も時間管理の重要性を説いている。

筆者は、受験「技術」に焦点をあてて指導することにより、半年余りの短期間で生徒の TOEIC<sup>®</sup> スコアが50～150点という飛躍的な伸びを示すことを経験的に知っている。

## できない実感をできる体験に

筆者が指導の対象にした高校3年生の TOEIC<sup>®</sup> スコア (IP<sup>(4)</sup> テスト) の全国平均は381点である。動機付けには苦しい点数である。受験するたびに「できない実感」を持ってしまうのは当然だ。そんな高校生を TOEIC<sup>®</sup> に取り組ませるために必要なのは「できる体験」である。「できない実感」が「できる体験」に変わるタイムスパンが短いほどインパクトは大きい。ここにヒルキ・ワーデン・前

田 (2006) のトレーニング (コーチング) が威力を発揮する。

「(トレーニングを受けて) Part 2 が魔法のように正解できた。」 「みんなにとっては Part 2 のインパクトが大きかったと思う。」 「リーディングだと Part 5 と Part 6 の読まずに解答するのはびっくりした。文法ってそんな見方もできんんだあって思ったから。」 これは筆者が指導した生徒の生の声である。この順番<sup>(5)</sup> がまさに「できない実感」を「できる体験」にする即効性のある指導手順なのである。

スコアアップのためのスコアアップではない。この「できる体験」が「やる気」つながり、英語の学習に拍車がかかることを望みたい。そして取得した TOEIC<sup>®</sup> のスコアが、国際交流という場で、生徒たちの未来を切り開いてくれることを切に願うものである。

#### 注

- (1) Test of English for International Communication の略。国内では財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC<sup>®</sup> 運営委員会によって実施・運営されている。1979年12月に第1回テストが実施された。
- (2) 2009年8月22日・23日に実施されたもので、ロバート・ヒルキ氏 (TOEIC<sup>®</sup> 指導者養成トレーナー/企業研修トレーナー) が講師を務めた。TOEIC<sup>®</sup> 860点以上は「Non-Native として十分なコミュニケーションができる」レベルとされている。
- (3) ETS (Educational Testing Service) は、1947年に設立され、米国ニュージャージー州プリンストンに拠点を置き、TOEIC<sup>®</sup> や TOEFL<sup>®</sup>、SAT<sup>®</sup> (全米大学入学共通試験)、GRE<sup>®</sup> (大学院入学共通試験) を含む約200のテストプログラムを開発している世界最大の非営利テスト開発機関。(TOEIC<sup>®</sup> 公式サイトより)
- (4) 団体特別受験制度 (IP: Institutional Program) とは、企業・団体・学校などの希望にあわせて、任意に TOEIC<sup>®</sup> テストを実施できる制度。(TOEIC<sup>®</sup> テスト『テスト案内』 2009年3月版より)
- (5) 『新 TOEIC<sup>®</sup> テスト直前の技術』では、著者たちの経験と学習ノウハウから、Part 2 → 5 → 6 → 1 → 7 → 3 → 4 の順で学ぶのがスコアアップに最も効率的であるとして、学習プログラムを提示している。

#### 参考文献

- デイヴィッド・グラドル (1999)、『英語の未来』(山岸勝榮訳)、研究社出版、東京。
- ロバート・ヒルキ/ポール・ワーデン/ヒロ前田 (2006)、『新 TOEIC<sup>®</sup> テスト直前の技術』、アルク、東京。
- Grant Trew (2007), Tactics for TOEIC<sup>®</sup> Listening and Reading Test, Oxford University Press, Oxford.
- 『企業・学校における英語活用調査—2009年』、財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC<sup>®</sup> 運営委員会、東京。
- 『TOEIC<sup>®</sup> テスト DATA & ANALYSIS 2008』、財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC<sup>®</sup> 運営委員会、東京。